

芥川だより

発行日 * 2024年4月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

子育ての厳しい現実



長く続いた工事もあと二日となったある日、まだ新米の工事監督が私に話しかけてきた。彼の毎日の生活を聞いて、私は仰天した。彼は本職以外に5つのアルバイトを毎日して睡眠時間はわずか2時間だと言う。花屋、バスの掃除、キャバクラ嬢の送りなど短時間のアルバイトを毎日やっている。私が、なんで稼がなあかんのやと問うと中学生を頭に3人の子供に金が要るからだと言う。アルバイトで本業程度の稼ぎがあるらしい。

彼の人生は阪神大震災で大きく変わった。彼が中学を卒業して神戸高専に入り一年目に震災は起きた。住居は神戸の長田で2階建ての2階に寝ていたから助かったが、1階はペシャンコに崩壊したが運よく助かり避難所暮らしを始めた。学校も再開の見通しがつかず、アルバイトに蔭を始めた。蔭になって2年目はかなりの稼ぎがあったが、3年目からはガタッと給料が下がり以後下がったまま30年近く働いてきたが、最後の転職機会だと思い今の土木工事会社に入った。

少子高齢化が日本の未来に暗雲を投げかけている。子供の養育費が大きな親の負担になっていて寝る間も惜しんで働き続けないと子育てできないとは、何とも恐ろしい時代だ。食費や部活、塾代など親の負担がどんどん増えているのだ。とても親の稼ぎだけではやっていけないのだろう。実家の協力が期待できなければどうすることもできない。若い夫婦が子供と住む戸建ての家が立ち並ぶ一角には、同じような家、車がある。どう見ても6千万を下らない出費だろう、若い人だけでは無理だ。親たちのかかなりの援助があるからできたのだろう。

昔は、金持ちの子と貧乏人の子と線引きした社会だった。そして多くは貧乏人の子だったが、今はみんなが金持ちの真似をしたがる。「貧乏人やから辛抱せい」と言っても子供は納得しない。ローンという便利な金融システムを考えだしたおかげで、貧乏人はますます借金地獄に追い込まれる。その一番の現象は、長時間労働だ。

死をめぐるあれやこれ(112) 石川 吾郎

日銀の利上げの生活への影響と報道

三月十九日に植田日銀総裁は金利の引き上げをしてマイナス金利の解除を発表した。従来の政策金利のマイナス〇・一%を〇・二%ポイント引き上げた形だ。その理由としては春闘が5%アップしたからだ。だが賃上げは大企業だけのことで、中小零細企業の労働者の給料が上がるわけではない。中小零細はそれほど体力はない。加えて最近のほとんどの物の物価上昇で実質賃金は下がり続けている。◆金利〇・一%というのは、それは銀行が融資をする場合の金利だ。この金利はたちまち私たち国民の多くが抱えている変動金利制の住宅ローンに適用されることになる。また中小零細企業の借入金利も上がる。物価が高騰するなか、私たちの家計にさらに追い打ちをかけると同時に、中小零細企業がこの金利に圧迫され倒産におこまれる。◆一方この利上げは金融機関をもうけさせる政策変更だ。私たちがメガバンクの口座に預金している普通預金の金利は、二十倍になると報道されているが、その実態は、融資の金利が〇・一%に対して、これはその二割の〇・二%になるにすぎない。つまりメガバンクは残りの八割分は濡れ手に泡で自動的に儲けとなる仕組みになっている。◆普通預金の金利は各銀行独自で決めることができるので、一部のネットバンクなどはこれに当てはまらないのだが大部分の市中銀行もメガバンクに習うことになる。つまりこの

政策は、弱者は死んでもいいという極めて弱者に冷酷な政策なのだ。◆このような「銀行に不都合な」事情は大手メディア、特にNHKはその解説番組でも一言も国民に伝えず口を閉ざしている。このような事実が日本の低迷する現状を固定化し、格差を拡大することの大きな要因になっていると私は考える。日本政府のトップに居座る者たちは、裏金を使い脱法行為を行い、この国を格差で有名な韓国以上の激しい格差社会へと作り変えてしまった。◆この状況を改善するには、国民がNHK報道の問題を認識することと、選挙で自公政権にNOを突きつけることがまず必要だろう。



安曇野の道祖神

芥川だより二〇七号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム112	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 121	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談71	祖蔵哲	3
大峰奥駈道77	下村嘉明	4
新型コロナウイルス愚考 その43	明石幸次郎	5
オクラの山たより91	因了生	6
隠された歴史66	満田正賢	9
俳句	影山武司	11
編集後記	S K生	11
ふみの道草70	山椒魚	12

素老人☆よもだ帳 (121)

坂本一光

◆人類を生んで未完の青い星 (続)

地球という物質世界は生命を生み出し、生命体はやがて人類に至った。出来そこないの存在で未完なのはもちろん人類であって地球ではないが、なぜか、人類を

生み出しながらこの星は未だ完成の域に到達していないと思ってしまう。それは、人類という「考える輩は未完を知っている」からなのか。
いずれにせよ、そんなことばかり思ってしまうものだから、高が五七五の十七音字が、パツと明るいものにならない。例えば、こんな風に未完の句ばかりが延々と並ぶ始末。お許しを。

らんまんの平和の岸がなぜ遠い

世が世ならいくさ格差にムシロ旗

戦争に格差にムシロ旗が無い

戦争を忘れていない反戦歌

生きるのに裏も表もないものを

愚かさもまかり通ってしまう世に

本物がかすんでしまうそっくりさん

天災も時代と人のマッチング

成熟と死は同じだと未熟な目

なみなみと想いたたえて上る月

戦争も飢えもない世が選べない

真夜中にボクを刻めば五七五

「人のため」胸に畳んで生きるもの

キーマンが消えて政治の闇露わ

ありふれた輩になれない人ばかり
ありふれた水になれない人ばかり
反共主義氷を笑う夏の虫
本心は赤が一番美しい
絶望も希望も虚妄日本晴れ
友あり遠方より来ずメール来る
征きはよいよい還りは怖い徴兵制
真つ直ぐなボクに歪んでいると言う
この道を誰にも涙見せずゆく
戦闘機輸出するほど落ちぶれる
九条の文化力よりトマホーク
人間を抜いてAI高笑い
人間の影薄くなるAI化
そこにいたそれだけでいい川の石
主権者を非正規と呼び恥じぬ国
記念切手を貼った投句が妙に増え
原発は想定外の事故をする
戦争も平和も神はつくらない
戦争も平和も人がつくるもの
まだほかに何か欲しいか神あきれ
わたしという度し難いものは持ち

人間であることの何かに心留め

人間のほかに問うべきなにかある

方円に従う水になれぬヒト

ありふれた水は何でも知っている

法天秤揺れて冤罪多数決

何も恐れず良心に従わぬ

大河小説のようにあふれる涙

未来から見られていると知りもせず

考える人ばかりでも困るけど

考える人ばかりとも思えない

点にも満たぬ人をつないだ太い線

現在が明日を決めると思えない

大きいと失くしたものを泣いた日も

小さいと手にしたものを笑う日も

人がみな哲学をする旅の途次

無重力宇宙旅行も金次第

多喜二の死囲んだ人も命懸け

繰り返す時を逃さぬ鬼あざみ

人間の芯が問われる時が来る

もの想う心でヒトは人になり

ありふれた水が命を究む春

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談 (71)

祖蔵 哲

〈原子力技術の哲学〉

2024年も早や四半分経過しようとしているが、時事ニュースには事欠かない。自民党による政治資金裏金問題は相変わらず検察の弱腰により幹部の刑事告発が見送られた後、自前の党内処分决定着を図ろうという魂胆である。国民の政治不信は頂点に達しているが、それが政権交代につながるのが現状である。戦後、2009年から3年間、民主党が政権交代をした以外ずっと自民党が政治を支配している。政治腐敗は政党だけの問題ではなく日本国民全体で起こっているのだ。そのような国民の意思が働かない中で、防衛装備移転三原則を改悪、戦闘機の輸出が可能になりアメリカを主とする西側諸国の軍事集団体制に組み込まれようとしている。ウクライナ、イスラ

エル、世界体制が大混乱している状況では正常な思考ができなくなっているのか。そういった状況に慣れてしまつて無関心が一番困る。「関心がない」「知らない」は「賛成」と同じである。現代はそういう時代に入っている。

さて、話題を変えよう。先月、アメリカで映画アカデミー賞の受賞式があった。日本映画としては宮崎駿監督の『君たちはどう生きるか』が長編アニメーション賞を、『ゴジラ・1.0』が視覚効果賞を受賞した。そしてもつと話題を集めたのが作品賞を受賞したC・ノーラン監督『オッペンハイマー』だ。

(1) 映画『オッペンハイマー』
昨年、世界で公開されたこの映画は日本ではすぐに上映公開されなかった。その理由は同時に公開された映画『バービー』との合成イメージで原爆を茶化して取り扱われたりしたからだ。さらにこの映画が直面した反発は、1945年に広島と長崎に投下された原爆の被害の描き方に関して沸き起こった。映画は理論物理学者のロバート・オッペンハイマーが最初の核兵器を開発し「原爆の父」と呼ばれるようになった後、史上最も破壊的な兵器を作ることの倫理的正当性に苦悩する姿を描いているが、20万人以上が死亡した原爆投下の恐怖には具体的に立ち入っていない。これらが問題になり日本での公開が数か月遅れ、やっと先月末に

上映された。

話題の映画なので早速見たが、予想以上に複雑な映画であった。第二次世界大戦前後の政治的歴史背景の知識なしにはとても理解できない内容である。物語には二つの大きな流れがある。一つは原爆開発をめぐるドイツとの開発競争と戦後の冷戦体制でのソ連との水爆開発問題。そしてもう一つは、その冷戦体制におけるスパイ活動と情報戦だ。オッペンハイマーは科学者であるが、それゆえに名誉を欲する野心家でもある。当時も現代も科学研究は莫大な資金を必要とする国家プロジェクトである。それゆえ政治とは密接な関係を持つ。研究開発の目的は何か。特に兵器の場合は敵対国への打撃である。第二次大戦の敵国はナチス・ドイツ。しかし、ドイツにはユダヤ人の優秀な科学者がいる。だが、ユダヤ人はホロコーストから逃げるべくアメリカに大量に亡命してきている。オッペンハイマー自身もユダヤ系出自である。核開発による原子爆弾製造は科学の問題から政治問題になるが、その科学的問題に付随する倫理問題が戦争では無視されるようになる。核爆発による大量のエネルギー放出はプロメテウスが人類に火を得た以来の大問題であるということも科学者は気づいていた。しかし、後には戻れない。政治問題は倫理問題を奥に押しやったのである。その場合、科学技術は中立の立場ではなくなる。ここに科学技術における

良心の問題が出てくる。同じ理論物理学者のアインシュタインは早くから核爆弾の危険性に警鐘を鳴らしていたが、オツペンハイマーが気付いたのは後になつてからである。この差が様々な喜劇と悲劇をもたらすことになる。

(2) 技術とは

古代ギリシヤの哲学者アリストテレスは技術(テクネ)を事物の生成にかかわる知識であると定義した。技術は、存在するものをつくり出すプロセスに関連している。つくられる作品の側には存在しないような事物を理論的に考察し、実際に生成するための知識である。自然によつて存在するものは対象とせず、技術は必然的に存在したり生成されたりするものを扱う。このような定義から技術は自然から非自然的なものを生み出すことであると理解される。

同じく古代ギリシヤ時代から「技術」に関して問題にされてきたのは「原因性」である。アリストテレスは原因性の概念を四種類に区分し、「質量因」「形相因」「目的因」「作用因」を挙げた。儀式に使うお供え用の銀皿を制作する場合の例えで説明すると、「質量因」は素材である銀。「形相因」はお皿の形。「目的因」は神前への奉納。最後に「作用因」としては、職人がこれらの三つの原因を取りまとめ、実際に皿を制作することが挙げられる。このような原因性に基づく「技術」

は自然にないものを「生み出す」ということだ。一方で、「自然」の側からみると、自分自身が隠していたものが暴かれるということになる。つまり、「技術」は人間による「自然」からの収奪である。

本来、アリストテレス以前において「自然」はこのような「技術」とは無縁であった。自然はその「恵」や「精神スピリット」を人間に与えられるものとして存在していた。例えば「芸術」「娯楽」である。自然を鑑賞することで人間は様々な安らぎを得、新たな思索を可能にする。古来より人間は「技術」を自然から収奪する「道具」としてではなく、共に生きるものとして「共存」してきたのである。しかし、今や「技術」は独り歩きし、高度な「専門性」によつて公衆の監視の届かないところで「自然」を収奪している。

(3) 「道具」の目的を無効にする原子力

前章で説明したようにあらゆる「技術」は道具的「形相」を持ち、「手段」としての「目的」を持つ。「核兵器」も兵器としての技術である以上同じである。「兵器」の目的は敵の殲滅である。しかし、このことが「核兵器」について当てはまるのか。

アインシュタインら理論物理学者が発見した核融合はそもそも地球上で生ずるものではなく宇宙規模で起こるエネルギーの移動である。それが兵器としての道具になれば影響の範囲は地球規模を超え

る。つまり、それが兵器として敵の殲滅を「目的」に使われたとしても、その「目的」は「敵の殲滅」それ自身をも超えて自分も含む「全地球人類」の殲滅に進む。つまり「核兵器」は「目的」を無効にする「手段」なのだ。これは原子力の平和使用についても当てはまる。

原子力は宇宙の「プロメテウスの火」である。プロメテウスは最高神ゼウスに逆らい人間に味方して人間界に「火」をもたらした。しかし、そのために彼はゼウスに復讐される。しかし、現代においては宇宙から「原子の火」をもたらしたのはプロメテウスではなく人間自身である。やがて人間も誰かから罰せられるのだろうか。

大峯奥駈道(77)

体験型人間学 27

下村 嘉明

2か月あまり毎日仕事をともにした彼の話をしよう。

年齢は72歳、私と同じだが3月生まれなので学年は一つ私より上である。小柄であるが身のこなしは軽やかでまめに

動くから私は助かる。彼と初めて片側通行の誘導を行ったときに、こいつは出来る、と直感した。通行する車を見落とさないし、合図も確実に送り返してくる。社内では珍しいぐらい出来る警備員だ。

これまで、出来ると言うから、言葉を用いて配置したら、あまいな合図や身のこなしに我慢できず幾度も配置換えをしてきた。やらしてみないと分からないのが私の偽らない思いである。片側交差通行の誘導は、相手とリズムがあえば楽しく面白いが、会わないとイライラするばかりで、非常に疲れる。これまでの経験の中では、伊丹で仕事した77歳の爺さんや、わが社のmさんとは非常に楽しくできた。その時と同じように楽しくできたのが彼だった。初めて一緒に仕事をしたが、確実な仕事ぶりは頼もしい。

彼の話では、両親とも北陸の出身で彼は尼崎生まれ尼崎育ちだから純粋な尼っ子だ。父は若くして事故で亡くなった。彼が35歳の時だった。彼は5人兄妹の長男なので奈良で仕事をしていたが、急いで尼崎に帰り葬儀をした。その時に集まった親せき縁者は500人ほどでビックリしたと言う。親や奥さん関係など兄弟が多く、その関係だけで350人は来るだろうと思っていたが、それ以上に人が来た。尼崎や西宮など親せきが近くなどで結婚式も大体350人は来るらしい。彼の話から、意外なことがあった。父親は工事会社で働いていて事故で亡くな

ったのだから、当然、労災認定が下りると思っただが、何も出ず。社長が自腹で葬式代を払ってくれただけだった。また、彼も一年前に、仕事中何かが頭に当たり意識不明状態が十日ほど続いて意識が回復した後、2か月入院した時も入院費や治療費は全額出たが、賃金は出なかった。日雇いのアルバイトは厳しい現実のなかで仕事をしている。労災は、なかなか下りないし、細かく調べる。出来るだけ払いたくないのだろう。

毎年、正月には多くの親せきが集まるという。奥さんが一人で料理を作るそう。奥さんは40年前から、小料理屋を営んでいるので料理はお手の物だという。すごいファミリーだと思う。今時、このように家族や親せき付き合いをしている人は、田舎や都会を問わず少ないだろう。

新型コロナウイルス禍愚考

(その43)

明石 幸次郎

幸福を得るための一部の条件として、その人の幼少期の育ち方、特に親、周りの人からの愛情とサポートをどのように

受けたかで違ってくることを、前回に書きました。

自分自身を振り返り、どんな育て方をされたのか？を思い出すと、私が生まれて1歳の時に、祖父が交通事故で亡くなり、母親にしては優しかった実父を突然失った精神的ショックは大きかったと思われませんが、母親からは、この時の話は一切聞いたことはありません。悲しみを抱えながらも、3人目の子供である私を母親はそれなりに育てたと思います。祖母のサポートもあつたと思いますが、祖母からは「あんたはお祖父さんの生まれ変わりやった」と、4歳ぐらいの時に聞かされたことは記憶しています。親、祖父母、親族の人から大きな期待と愛情（愛着）をかけられた長男の兄と違い、次男坊として普通の愛情（愛着）をかけたながら、育てられ、幼児期において心身のハンディキャップは、なかったため、普通の人間として育つ人格形成の基礎は作ってもらったと思います。

それでは、今まで生きてきて、老齢期に入り、これから死に至るまでの残された時間を、どう自分自身が幸せを感じ、そして幸せになれるかを考えてみて、「幸せとは何か」の自問を今回で終わらせたいと思います。

前回に書いた、年下の友人は幸せに繋がるのは「平穏な心の状態」と言ったが、あの兼好法師も「徒然草」の中で「心がもし安定に保たれないならば、どれだけ

の財宝や楼閣のような建物があつても虚構の空洞である」と言っている。いくら物質的な豊かさに満たされても、それが心の安定をもたらさず、幸せな境地を得るには至らないと言うのは、人間の幸福はものだけでは、得られないということです。

アランは、物質的に不自由のない生活が保障されても、幸福は自分の手で作り出さねばならない。まずは、幸福が向こうからやってくるのを「待つ」のではなく自分で「作る」のであると言っています。

それでは、どう自分で幸福を「作る」のか？それは、まず、幸福になりたいと自らが欲して、それに身を入れることが必要である。それは、「上機嫌」にまずは自らがなることで、他者に対し「微笑みのまね」をして、「ひとこと」感謝の言葉を言えば良いと、我々は、気分というものはいつでも悪いものであり、その不機嫌を意志で抑えこまなければならぬ。あらゆる幸福は意志と抑制によるもので、

幸福は態度であると言っています。反対に不機嫌な人間、すなわち不幸な人間とはエゴイストである。そのエゴイストが悲しいのは幸福を待っているからである。思い出すのは、私が高校生の時に、

勉強、クラブ（野球部）も思うような成果を上げられず、いつも悶々としていました。そんな時に母親から「あんた、機嫌よくしなさいよ。不機嫌そうにしてい

たら、周りが暗くなり、友達も寄り付かなくなるし、女の子には嫌われるよ」と、機嫌よくしなさいとよく言われていました。機嫌よくすることが周りの人によい影響を与えて、何よりも自分自身を豊かにする、それは礼儀であるとアランは言っています。一庶民の母親は別にアランの本を読んで私に機嫌よくしなさいと言ったわけではなく、機嫌よくすることが、日常的に人との関係を良くするための礼儀だと思っていたようです。近所の人に對する挨拶でも「あら、ご機嫌さんやね」とか別れる時に「ご機嫌さんでね」とよく使っていました。

機嫌良くする努力が、心身の健康に繋がりが、周りの人に対しても、機嫌の良さの交換によって増大する宝物となるものであると思う次第であります。

又、布施（他者へのサポート）、愛語（やさしい言葉）、利他、同事（同じ目線で考える）は、仏教が説く四摂事（幸せになれる四つの教え）と言われますが、これをボランティアなどで「機嫌よく」実践することで自己満足の幸せを、自分なりに感じたいものです。果たしてこれで心の安定が得られるかは、修行を積まないと得られないかも知れません。

オクラの山たより (91)

困生

一

私たちが学校で学んだ江戸期の俳人の序列は一茶の評価は俳聖芭蕉がトップに立ち、蕪村がそれに続き、ちよつと離れて一茶がそれに続くというものでした。

しかし、すでに紹介したように一茶をもっと高く評価しようという動きが近年出て来ました。その内容を優れた俳人であり俳句理論家でもある長谷川權（以下、長谷川と略します）の主張から見えてきます。

長谷川によれば江戸期の俳句の流れは次のように整理されます。

- 1 江戸時代前半（天明の大飢饉まで）
古典主義の時代
・貞門・談林（言葉遊び）
・芭蕉
（蕉風開眼により俳句に心の世界を開く）
- 2 江戸時代後半（天明の大飢饉から大衆化⇨近代化のはじまり）
・一茶（近代俳句の始まり）
・子規に「月並」と一掃された俳人たち
- 3 明治・大正・昭和
西洋化の時代

- ・正岡子規「写生俳句」の提唱
- ・高浜虚子（大衆を束ねる方法の完成）

この整理で分かりにくいのは先ず芭蕉が「心の世界を開く」です。これを長谷川は次の二句で説明しています。

・しづかさや湖水の底の雲のみね

1788（寛政四年） 一茶

・閑しずかさや岩にしみ入る蟬の声

1808（元禄二年）「奥の細道」 芭蕉

一茶の句は琵琶湖での句。「しづかさや」が同じなので立石寺での芭蕉の句はすぐ連想されます。とはいえ一茶の句は雲の峰」という映像から生まれる「しづかさ」であつてどこまでも分かりやすい句であり、芭蕉の句が持つ「奥深さ」はほとんど感じられません。これで一茶がダメだというわけではありません。なんといつても視覚的で分かりやすいことが一茶の特色ですから。では、芭蕉の句の奥深さはどこから生まれるか。それは「心の「閑さ」であるからだ」と長谷川はいつています。芭蕉の句は岩にしみ入るほどに蟬が鳴いているのに「閑」となつていて矛盾した表現となつています。このちぐはく感が読み手をこの句の世界に誘い込む呼び水になっていきます。つまり、読者はこの「閑さ」が蟬がうるさく鳴いている現実の世界とはまったく別の世界、

次元の異なる「心」の「閑さ」気づくことになりま。かなり大胆な仕掛けがあるわけですが、芭蕉は見事に成功させています。これと同じように有名な次の句も

・古池や蛙飛こむ水のおと

1807（貞享三年） 芭蕉

蛙がどこかの古池に飛びこんで水の音がしたという句ではなく、蛙が水に飛び込む音を聞いているうちに芭蕉の心に古池が浮かんだという句だ、と長谷川權はいつています。こうした「心」の世界、どこまでも広がっていく宇宙的（長谷川が芭蕉の句を解釈するさいに多用する語です。筆者は「絶対的で俗世を越えたイデア的世界」という意味だと理解しています）ともいえる世界を俳句の中にもちこんだことこそ芭蕉の功績だともいつています。

次の二人の句に対する長谷川の批評も面白いので紹介します。

・うき我をさびしからせよ閑古鳥

1801（元禄四年）「猿蓑」

・木つつきの死ねとて敲（たた）く柱哉

1805（文化二年）

「うき我を」の句は芭蕉の有名な句ですが、「うき」と「さびし」を芭蕉はどう区別していたのか、気になります。「うし」とは憂鬱であることで何かが思いと

おりにいかず気分が減入っていること。特に古典では恋についていた語です。また「さびし」は一人ぼっちでまわり人にいず孤独であることです。「うし」と「さびし」とは明らかに違う状況を述べた語で「うし」は世俗的な倦怠感で「さびし」は絶対的な孤独感をいつた語です。芭蕉は自分の憂鬱を絶対的な孤独、つまり宇宙的な淋しさにまで高めてくれと閑古鳥に呼びかけています。俗な世界からイデア的な美の世界へと飛躍していくきわめて芭蕉らしい句です。

これに対して一茶の「木つつきの」句は「死ね」といつているかのようにキツツキが柱をたたいている、という句です。かなり衝撃的で直接的な句ですが、「死ね」という言葉を日本の詩歌で使ったのは一茶が初めてかもしれません。俳諧の持つ古典的な匂い、それは芭蕉には濃厚に蕪村にはまだたぶんに漂っているのですが、そんな古くからある日本人の共通感覚を突き抜けた言葉遣いは一茶らしい句だといえます。そうした点でも一茶は芭蕉から抜け出し新たな一歩を確実に踏み出した俳人だと長谷川はいつています。

一茶の再評価で大きな影響を受けるのは蕪村でしょう。一茶を持ち上げる長谷川の蕪村評価は従来のそれとは大きく異

なります。

蕪村（一七一六〜八三）は芭蕉と同様、江戸時代前半の古典主義の時代の人である。芭蕉の俳諧を前へ進めた人ではなく追隨者であったといわねばならない。俳句を大衆化の時代へと進めたのは古典的教養の欠落していた一茶だった。

2024年1月刊 河出文庫「小林一茶」

一茶に古典的な教養がなかったかどうかはさておき蕪村の句に対する長谷川の見方を見てみましょう。

- ・牡丹散つて打ち重なりぬ二三片
- ・不二ひとつづみ残して若葉かな
- ・春雨や同車の君のさざめごと
- ・鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな
- ・行く春や重たき琵琶の抱きごころ

最初の「牡丹散つて」の句も「不二ひとつ」の句も一幅の花鳥画・風景画を見るような美しい作品です。長谷川はこれらの句について絵画の俳句化であり、こうした蕪村の句を喜ぶ人は絵を喜んでいふことになる、と長谷川はいつています。しかし、そうはいつても美しい句です。絵師であり俳諧師でもあった蕪村らしい句です。美しい絵画的な句は俳句としては不十分であるのか。美しく、暖かく人の心をいやし、柔らかな蕪村の句は読む

人に少なからざる感動を与えてくれます。たとえ絵画的であろうとも、それまでほとんどの人に表現されることなかった新しく美しい風景の発見すること。それは新しい内面の発見につながり、それが言語化されれば新しい文学表現となっていく。「万葉集」以来の詩歌の流れを見ていくとそんな流れが見えてきます。芭蕉のいう「不易流行」ということばが詩歌を創作する者にとって意味を持つ一因といえます。

次に「春雨や」以下の句を見てみます。「春雨や」は平安時代の牛車の知識、「鳥羽殿」は保元の乱の知識、「行く春や」は白居易の詩「琵琶行」と中宮定子が夜に琵琶を抱いて弾いたという「枕草子」の知識がなければ十分な句の鑑賞はできないでしょう。これらの蕪村の句は確かに古典の知識がなければ作れない、読んでも理解しにくい句ではありません。

しかし、こうした蕪村の句を理解するために必要な古典の知識が江戸時代後期にあって一部の人だけの独占物であったかどうか、また、古典の知識がないこと、それが俳句の大衆化の上で障害となったかどうか。以下、検討してみようと思います。

三

一七二二（享保六）年閏七月のこと。時の将軍吉宗が目安箱を設置しました。

それはよく知られた歴史的な事実です。目安箱は役人の綱紀肅正と民意を政治に役立てるために設置され、これによって「赤ひげ」先生で有名な小石川養生所の設置、町火消の創設が実現したことはよく知られています。

この目安箱について将軍側近の儒学者室鳩巢は興味深い出来事があったことを伝えています。

関東幕府領の「百姓名主の子」で学問のあるものが目安箱に投じた訴えが「漢文にて調（とと）候ひて、御勘定頭など読みかね」「その書面常体の文段にてこれ無く、文章に相調い候ふに付き、御奉行以下読み得（え）申す者これ無く」、つまり、江戸時代に日常的に使われていた仮名交じり文ではなく、漢字者が書くような見事な漢文の文章であったので、勘定奉行などの主だった幕臣たちが読むことができなかったというのです。困った吉宗は学問があるという勘定吟味役辻守参（つじもりみつ 1652〜1738 農政のスペシャリストで「地方（じかた）の聖（ひじり）」といわれた）に読ませたところ内容は幕府領での民政に関わるものでした。吉宗はこの訴状を高く評価して、指摘された点はきちんと回答せよ、と指示したと室鳩巢は書いています。

日頃、旗本の子弟たちに対して「学問も深きことはこれ無く候ふとも、『小学』『四書』は素読もつかまつり得申す程に心がけ候ふやう（学問も深いところまできわ

めなくてもよいが、『小学（漢文の基礎を学ぶ入門書）』『四書（儒学の基本文献）』程度の書物は読めるように心がける）」ことはできないものかと頭を痛めていた吉宗にとつてこの出来事は大きな発見でした。それは百姓身分であろうと、その「学問」は武士身分よりも優位な場合もあるということでした。吉宗は目安箱設置の翌年に幕府の出す「御法度」は「末々の者」にあつては「心に御覚え候ふ者」はまれなことだから、俗人・寺社の者に限らず読み書きのできる者は村の人々に字の読み方や主だった法度や人の道徳などを教えよと触書を出しました。

考えてみれば近世の村社会には名主や庄屋などの上層農民、村医者や寺子屋師匠、寺僧・神主といった人々が村役人または村の知識人として存在していました。そうした彼らのもとには彼らに教えられる「村の子ども」や法度の内容を理解し俳諧や謡も楽しむ一般の百姓たちが多くいました。村の民衆を知的にリードしうるこうした人たちは年貢納入、村落行政、民衆教化といった面でも兵農分離した藩の武士にかわつて「村請」制度を支えていたといえます。彼らを媒介としてはじめて藩の領主は一般の百姓に対することができました。目安箱の設置で吉宗が改めて気づいたのは「兵農分離」という社会システムが必然的に要求し生み出した民間の社会の姿であつたということです。

江戸時代も後半になると、すでに触れたように一茶も含めて村の社会の子弟は都市で奉公するのに必要な読み書き算盤は村にあった寺子屋等で習い覚えていました。すでに吉宗の目安箱の話でも十七世紀前半に都市からは離れた村落社会でもかなりのレベルの「学問」がおこなわれていましたから、十七世紀の後半ではなおさらだったのでしよう。

ひとつの例を示せば一茶の故郷である北信濃の柏原の近くに中野（現在は長野県中野市）に放浪の詩人柏木如亭が開いた「晚晴吟社」という漢詩の結社があり、中野近郊の庄屋の生まれである木百年（ぼくひゃくねん 1768～1821 本名は木敷寿または木敷鼎助）という漢詩人が出ています。活躍の時期は一茶と重なり晩晴吟社の同人の家には一茶はたびたび訪れています。その木百年が次の漢詩「山村六首」を作っています。江戸時代後期の著名な漢詩人菊池五山が編集出版した「五山堂詩話」で高く評価され紹介された詩です。

山村六首 (その五)

寒天欲暮開窓坐
雪景蕭条宿鳥遠
心冷句中因説水
脚旁夢裏為登山

有僧求米入蓬徑
無吏催錢敲竹閑
拋擲利名耽靜僻
岫雲何似此身閑

寒天暮れんと欲して窓を開いて坐す／雪景蕭条として宿鳥遠（かえ）る／心の冷ややかなるは句中に水を説きしに因（よ）り／脚の勞（つか）るるは夢裏（む）り／山に登りしが為なり／僧の米を求めて蓬徑（ほうけい）に入る有るも／吏の錢を催（う）ながして竹閑を敲（たた）く無し／利名を拋擲して靜僻（せいへき）に耽（ふ）け／る／岫雲（しゅううん）何ぞ似ん此の身の閑なるに

暮れかけの冬空のもと窓を開けて坐っている、さびしい雪景色の中を鳥がねぐらに帰って行く。私の心が冷え冷えしているのは詩句に水を詠みこんだためであり、足が疲れたように感じるのは夢で山に登ったからだろう。米を求めて我が家の荒れた小道に入ってくる。托鉢の僧はいても、錢を催促して我が家の粗末な竹の門を叩くような役人はいない。私は世俗の利益や名譽といったものを投げ捨てて辺鄙な地での生活を楽しんでいる。朝には山の洞穴を出て夕べには戻ってくるという雲も我が身の閑寂さに比べれば忙しいというものだ。

才氣走った表現もなく新鮮味も乏しいですが、おとなしめの閑適の詩であり、漢詩のルールもきちんと守られており、ま

ずは及第点がもらえる詩です。全国の村落社会にはこれほどの漢詩ができるほどではなくとも村の知識人は多数いたはずです。そして、彼らによって読み書き算盤、そして、多少の古典の知識を身につけた中層、下層農民が奉公人として江戸などの都市に出かけていったことでしょう。

そういった人々のうちで都市に出た何割かの人は次の詩を読む機会があったかもしれません。作者は畠山銅脈（1752～1801）。「狂詩という様式を完全に文学の域まで押し上げた」といわれる詩人で「滑稽の南畝、諷刺の銅脈」と当時いわれました。次の詩は京の先斗町で見た乞食の姿を描いた詩です。華やかな花街で出会ったホームレスの姿に悲痛な詩情を感じとって詠んだ詩です。銅脈の狂詩にはそれまで誰も詩にすることのなかった最下層の人びとの姿・世界を詠んだ詩が多くあります。なお、「花子」は女性の名前ではなく「乞食」を表わす漢語です。

寄花子（花子に寄す）

裾断薦壞屋尚寒
今朝無貴腹中乾
回頭千手觀音落
閑向日方子細看

裾断（き）れ薦（こも）壞（やぶ）れて屋なほ寒し／今朝貴（もち）ひなくして腹中乾く

／頭を回（めぐ）らせば千手觀音落つ／閑（しず）かに日方（ひなた）に向ひて子細（こま）に看（み）る

着る物の裾はちぎれ薦も破れて屋でもまだ寒くてたまらない。今朝は「おめぐみ」もなくて腹（はら）こた。頭をまわすとシラミ（「千手觀音」はシラミの隠語）が落ちてくる。日なたで音も出さずにシラミつぶしをしてつぶしたシラミをジッと見つめる。

唐代や宋代の漢詩を模倣したような漢詩、また、文人墨客が喜ぶような風雅な漢詩だけでなく、すでに時代は漢詩ですら詠む世界をグッと広げていたのです。最底辺の売笑婦、何の希望もなく生きていく乞食の姿にも詩情はあったのです。畠山銅脈は改めてそれを発見したといえます。

こういった都市の隅にある社会の暗部を詠んだ詩を江戸時代の後期では都市でも農村でも、読書家で勉強家でもあった一茶も含めて多くの人たちが読んでいたと考えられます。

また、漢詩の理解には手が届かないまでも都市の民衆によって和漢の古典や歴史の知識を前提にした狂歌や川柳が広く読まれていました。

このことは長らく一定の枠内で蓄積されてきた日本の美意識、それは上流社会の人々や知識人の間で伝えられてきた伝統的な美意識ですが、それが江戸時代後

隠された歴史(66)

満田 正賢

期になって梓を越えて広く民衆の間にも共通の知識・感覚となってきたということです。文芸が大衆化していく上で和漢の古典の知識が障害になったわけではありません。むしろ、古典が大衆化されることによって新たな文芸の世界が開かれていったといふべきでしょう。もちろん、あらゆる芸術は大衆化されることによって劣化、卑俗化することは免れません。

江戸後期に発行され続けた「俳風柳多留」も人間の内部を見つめる鋭い人間凝視がなされた秀句の多い初期の作品に比べ後期の句は人間の陋劣な部分を嗤(わら)うだけの低劣な作品が多くなっています。

俳句でも子規から月並調といわれた天保以後の俳句には師匠の教えを守って決まり切った同じ調子で詠んだ句が多くありました。江戸後期の俳人の中には優れた俳人もいたのですが、最も光っているのは一茶です。自分のまわりにある自然や人のありようを見つめ、心に映じたままに彼の特異な才能によって世俗な言葉も時に使いながら句作をしていった一茶。彼は古典にまみれた世界から新しい俳句の世界へと一歩を踏み出したトップランナーであつたといふべきでしょう。

今まで、卑弥呼の時代から、倭の五王

時代(前期九州王朝)、継体による前期九州王朝への侵略(磐井の乱)、宣化の子の那津官家への遷都(後期九州王朝の設立)、蘇我氏の近畿の覇者としての振る舞い、九州王朝支持勢力による蘇我本宗家打倒(乙巳の変・大化の改新)、白村江の敗戦による九州王朝から近畿王朝への実質的な権力の以降、大宝年号の建元による名目的な王朝交代、といった日本書紀によって隠された歴史を、時代を行き来しながら、又途中寄り道をしながら描いてきました。

前回の大宝年号建元に関する考察で、ひとまず近畿王朝の正式な発足までの通史的な考察は終えましたので、これからは、今まで考察してきた内容の修正、または補足をしていきたいと思えます。

まず、「隠された歴史(26)」で触れましたが、「隠された歴史」の連載以前に七回にわたって連載した「邪馬台国と火の国」の内容の修正を行いたいと思えます。三国志魏志倭人伝における対海国(対馬)、一大国(老岐)の記述に続く文章は次のとおりです。

「又渡一海千餘里至末盧國 有四千餘戸 濱山海居草木茂盛 行不見前人 好捕

魚鱧 水無深淺 皆沉沒取之」

「東南陸行五百里到伊都國 官日爾支

副日泄謨觚柄渠觚有千餘戸 世有王

皆統屬女王國 郡使往來常所駐」

「東南至奴國 百里 官日兕馬觚 副日

卑奴母離 有二萬餘戸」

「東行至不彌國百里 官日多模 副日卑

奴母離 有千餘家」

「南至投馬國水行二十日 官日彌彌 副

日彌彌那利 可五萬餘戸」

「南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日

陸行一月官有伊支馬 次日彌馬升 次

日彌馬獲支 次日奴佳鞮 可七萬餘戸」

「自女王國以北 其戸數道里可得略載

其餘旁國遠絶 不可得詳次有斯馬國

次有已百支國 次有伊邪國 次有都支

國 次有彌奴國 次有好古都國次有不

呼國 次有姐奴國 次有對蘇國 次有

蘇奴國 次有呼邑國 次有華奴蘇奴國

次有鬼國 次有為吾國 次有鬼奴國

次有邪馬國 次有躬臣國 次有巴利國

次有支惟國 次有烏奴國 次有奴國

此女王境界所盡」

「其南有狗奴國 男子為王 其官有狗古

智卑狗 不屬女王 自郡至女王國 萬

二千餘里」

「邪馬台国と火の国」の要旨を簡単に簡条書きにしてみました。

①末盧国は唐津(又は伊万里)近辺である。

②奴国は吉野ケ里一帯。伊都国と不弥国は奴国の衛星都市であり、伊都国は軍事的・政治的拠点、不弥国は外港都市で有明海又は筑後川に面していた。

③魏の使者は不弥国から南に水行して二十日間で投馬国に着き、水行十日で邪馬壹国に着いた。また邪馬壹国から陸行一か月で奴国に戻ってきた。投馬国は長崎・島原周辺(*宮崎康平氏が「まぼろしの邪馬台国」で邪馬台国に比定したところ)。邪馬壹国は阿蘇山を有する肥後地方一帯。

④邪馬壹国の中で南に位置する女王国は火君がいたとされる八代近辺。

⑤狗奴国(*国名に多く使われている「奴」の字は格助詞の「の」に相当し、狗奴国は「くのくに」と読む)は女王国の南に位置する熊本県球磨地方。狗奴国には男王狗古智卑狗という名前が記されていることからともなは女王の配下にあつた国と考えられる。

(追記)

「海でつながる倭と中国 邪馬台国の周辺世界」檀原考古学附属博物館編(新泉社)の中で、森浩一氏は次のように述べています。

「狗奴国というのは、熊本県の南部のものとの肥後国球磨郡だと思います。(中略)北の女王国がどちらかというとい

かけはきれいだけど実用の武器としては弱い青銅器を盛んにつくっていたのに対して、狗奴国では早くから鉄製武器をつくっていました。」

2.「自女王國以北 其戸數道里可得略載」の解釈について

①「自女王國以北 其戸數道里可得略載」という文章は、「女王國の以北は、其の戸數・道里を略載することが可能だ」と解釈することが出来る。(＊この解釈については古田史学の会会員の野田利郎氏の説を借用しました)

②対海国から不弥国までは方向、里數、戸數が記載されており詳述されている。略載されたのは、女王國以北の二十一家国のことである。魏の使者は不弥国から水行して邪馬壹国に入り、邪馬壹国の中にある二十一家国を訪問しながら、陸行して奴国に戻ってきたのである。

③二十一か国の終点は奴国であり、これは二万戸を有する奴国と同一の国であるとしたか考えられない。

3.「自郡至女王國、萬二千餘里」の意味

①これは、魏の使者が女王國にて周髀を用いて一寸千里の法で帯方郡からの距離を測定し報告書に記載した内容である。陳寿が机上計算によって付け加えたものではない。

②「邪馬台国と火の国」で紹介しているが、東京都立大学名誉教授の野上道男氏は、二〇一五年に東京地学協会伊能忠敬記念講演会での「中国古代における地の測り方と邪馬台国の位置」という講演において、「方位と距離」「天文測量法としての一寸千里法」「一寸千里法についての野上の見解」「古代中国の地図」「方位の測量法」「方向線の延長方法」という小題で語ったあとで、最後に「邪馬台国はどこか」という小題で講演を締めくくっている。その結論は、『東南一万二千里』という測量結果から、邪馬台国は宮崎平野南部に、誤差を考慮しても南九州に、存在したといえる」というものである。

私は「隠された歴史(26)」において「邪馬台国と火の国」は半分正しく半分は間違っていたとして次の理由を掲げました。

第一の理由は、唐津は有名な菜畑遺跡など弥生時代すでに開かれた土地であり、「草木茂り魚を好んで捕る」と記された末盧国のイメージに合わないということ。又魏志倭人伝の末盧国の記述に「官」と「副」の名前の紹介がないことから、魏の使者は末盧国の中心地には行かなかった可能性が強いと考えました。私は昨年現地を訪問して、末盧国は東松浦半島先端の呼子付近ではないかと想定を変えました。それによって末盧国の東南五百

里にある伊都国が糸島半島の付け根付近に存在しうることになりました。

第二の理由は、私は火の国が先に西北九州に建国されその後朝鮮半島の勢力が火の国の領土に侵攻し筑紫国を建てたと考察しましたが、魏志倭人伝には倭国が乱れた後卑弥呼がその乱を治めたと記されています。すなわち帯方郡の使者が来た時代には火の国と筑紫国の抗争は収まっていたと思われることです。古田武彦氏は、卑弥呼は「ひみか」と読み、筑後風土記に出てくる「甕依(みかより)姫」ではないかと推定しています(古代は輝いていたI「朝日新聞社」)。筑後風土記には甕依姫が「筑紫の君」や「肥の君」の共通の「祖」であり、共通の「祝(はふり)」として両国の堺にいる甕猛神(あらぶるかみ)を収めたとしるされています。私もこの古田氏の推定が正しいと考えるようになりました。

第三の理由は、これが私の説を変えた最も主要な理由なのですが、糸島半島にある平原遺跡や博多駅の南側に広がる比恵・那珂遺跡の存在を無視して三世紀の日本の姿は語れないと考えたからです。

一方、「邪馬台国と火の国」の中で考察した内容が半分正しいと考える理由は、「女王之都」を「女王が都していた所」と過去形で捉えれば、不弥国以降の各国の考察が妥当性を持つからです。火の国と筑紫国の抗争を収めるために火の国の女王が筑紫国に移り両国の共通の女王と

して君臨したと考えれば過去形で記した理由も説明がつかます。正始八年(二四七)に倭国に派遣された塞曹掾史張政は狗奴国との抗争を支援することを目的としています。当然狗奴国と接する地域に出向いた。そしてそれは狗奴国の北に接する女王卑弥呼の出身地であった。張政は水行して抗争地域に行き、陸行で邪馬壹国の中にある二一か国に立ち寄りながら倭国の中心地であった奴国に戻ってきました。そう考えると魏志倭人伝の記述のつじつまが合います。

末盧国の位置の変更について補足すると、一大国(老岐)から呼子までの距離は28km、短里で四百里弱であり、千餘里という記述とは合致しません。しかし老岐から唐津までの距離も44km、短里で六百里弱であり、しよせん千餘里とは合致しません。魏志倭人伝には狗邪韓国(韓国金海市近辺と思われる)、対海国(対馬)、一大国(老岐)、末盧国の間がすべて千餘里と記されています。金海と呼子の間は直線距離で215km、短里では二千八百里です。この航海の距離を記した人物は、狗邪韓国から末盧国まで三回の航海の距離をすべて同じ距離の航海として記したのではないのでしょうか。伊都国、奴国、不弥国の位置の変更に ついて、もう少し詳しく説明すると、伊都国は遺跡の規模と内容を考えて、糸島半島平野部(平原遺跡)、奴国は一万戸と

いう規模から考えて、福岡平野一帯（須玖・岡本遺跡、比恵・那珂遺跡を含む）、不弥国は福岡平野の東に位置する、筑後川の支流である宝満川の河岸地域（大宰府近辺）だと考えます。

魏志倭人伝には、「其國本亦以男子為王住七八十年倭國亂相攻伐曆年乃共立一女子為王名曰卑弥呼」という文面があり、卑弥呼が収める前の状態をいわゆる倭国大乱と呼んでいます。私はこの抗争を筑紫国と火国の争いと考え、それを収めるために火国の女王が筑紫国に移ったと考えました。

筑後国風土記逸文に甕依姫（みかよりひめ）伝承が記されています。古田武彦氏はこの甕依姫伝承は卑弥呼（ひみか）の伝承であると考察しました。この伝承は、筑後国風土記曰くとして、釈日本紀（しゃくにほんぎ）巻五に「筑紫洲（くに）」の表題で載っている伝承です。この伝承は、「国境に往来の人の半分を殺す荒ぶる神がいて、筑紫君、肥君が占いをし、甕依姫（みかよりひめ）を神主にして荒ぶる神を祭らせた」というもので、史実をそのまま伝えているものではありません。そしてこの「筑紫洲」の伝承の最初には「筑後国は元々筑前国と合わせて一つの国であった」という文面があり、伝承の最後は「後に二つの国に分割して、筑前と筑後とした」という文面で終わっています。私はこの伝承を、筑後国の成

り立ちの話と甕依姫伝承が合体されたものであると考えます。なぜ「筑紫洲」の伝承に肥君が出てくるのでしょうか。甕依姫伝承の国境とは、筑前の国と筑後の国との国境ではなく、本来は筑紫国と火国との国境であったのであり、だ

（肥）国との国境であったのであり、だからこそ筑紫君と肥君が争いを収めるために相談したのではないかと考えます。佐賀県吉野ケ里遺跡は、最初に本格的調査が入った一九八六年に、発掘された環濠集落の規模と多くの埋蔵物や甕棺、墳丘墓の存在から、ここが邪馬台国ではないかと話題になりました。そして昨年、遺跡の中心部の近くに神社があったため調査されていなかった「謎のエリア」の発掘調査結果が公開され、再度注目を浴びました。

私は「邪馬台国と火の国」では吉野ケ里を邪馬台国の実質的な中心地であると考えましたが、修正後の考察によれば、吉野ケ里は、筑紫の国との国境に近い火国の支配地になります。

吉野ケ里は二重環濠など集落の防御を重視して作られています。又、発掘された甕棺の中の人骨には傷ついたものや矢じりが刺さったままのものや、首のないものが多くあります。吉野ケ里で壮烈な戦いがあったことを想起させます。まさに倭国大乱の最前線だったのではないのでしょうか。

俳句

影山 武司

伊那谷のなぞへの険し路の臺
受難者はいつもやさしく葦草
心経のふと腑に落つる朧の夜
硬筆の音の軽やか日永かな
新築の玻璃の磨かれ風光る
杣道の竹杖しなひ初音かな
木の芽風櫂を空へ広げをり
花時計の文字盤滯らす春の雨
大桶の洞より漏るる春の声
石仏の頬のふくよか花菜風

編集後記

SK生

▲例年より遅く桜が開花して「さきいづるやさくらさくらとさきつらなり」という荻原井泉水の句の通りの花のもとに多くの人が春の到来を寿いだことであろう。そして、この桜が散れば初夏がやってくる。その後に来るのは酷暑の夏の再来である。▲去年は暑かった。猛烈な暑さで

あった。しかし、その暑さ以上に庶民がこたえたのは諸物価の値上げである。毎月の収入が一定である年金生活者である小生などは特に困る。1000円が1500円となる見え見えの値上げばかりではなく、先日まで一袋6個入りのパンが知らぬ間に5個入りになり、4個入りにもなっている。株価は史上空前だそうだが、国民の実質所得額は減る一方である。天下の回りものたるお金はいったどこに雲隠れしているのか。財布の中身と商品を見比べてため息をつくばかりだ。▲旧約聖書にソドムの話がある。繁栄を誇り退廃を極めた都市が神の怒りに触れて天から注ぐ炎によって一夜にして地上から消えたという話だ。神の怒りはともかく最近の研究では巨大な隕石が空中爆発をした際の超高温の爆風で消滅した可能性があると。多量の核兵器が一気に空中で爆発したと同じことが起きたのだ。人知を越えた現象であり、心に浮かぶ言葉は「神の怒りを思え」である。▲春になれば陽の光は増してすべてものに降り注ぎ、花は咲き乱れ、生き物は生気を取り戻す。すべての人々が花見の下で見せるような笑顔で生活の不安なく毎日をごせる日は来ぬものかと切に思う。暗い世相を見れば気分は暗くなるばかりだ。ソドムの例は御免だが、では、どうするのか。散る桜を前にして腕組みしてみるか。

春爛漫の四月、川柳への道草は続く。

一枚の水一枚の紙を漉く

南北

一枚の紙を漉く作業を、「水一枚」と表現したことにハツとする。水の冷たい透明感をおおして、紙漉きに臨む人の凛と張り詰めた心までもが読む者に伝わる。

人生も付録の今が面白い

修一

人生の店仕舞いがちらちら見え始めた頃に、「人生にこんなに余白あったのか」

(南北) と思える「付録」を見つけられるとはなんとという幸せなことだろう。

近道は知っているけど深呼吸

修一

深呼吸して、やはり近道を行くのは止めて真つ当な道を行こうと思つたか。いやいや…。作者の選択や如何。

近道と言えば、マルクスの引用でも有名な「学問に王道なし」のことわざがある。ギリシヤの数学者ユークリッドがエジプト王の問いに「幾何学に王道なし」と言い放つた故事に由来する。ここに言う「王道」は、「③(王様用の)楽な道」

近道」の意であるが、二〇一九年刊の辞書にはこの用例説明より前に、「①帝王が仁徳をもととして国を治めるやりか

た(覇道に対する語)」、「②最も正統・

当然な(と思われている)方法・こと」

の意が置かれている。二〇〇九年の辞書では、「王道」の説明は①と③の二つだけ

で②は無い。今や、学問に限らず、②の意で「〇〇に王道なし、ちゃんとやれ」

は、王道の誤用ではない。

そうすると、例えば「王道を行くが道草し放題」の句に言う「王道」とは、近道なのか正統な道なのか、どつちの道だろうなどと考えてしまう。

友よりの手紙がうれしスマホ越え

廣

今更ながらであるが、パソコン・スマホの普及で、用事はメール・メッセー
ジ・ラインなどで片づけてしまうことが多い。筆不精と言いながら、キーを叩くことにはこまめな人が多い。「朋有り遠方より来る、亦樂しからずや」は、すつかり、「友あり遠方より来ず便利な世」となってしまった。

さて以下は、人生旅の途上でそれぞれに感じる「しみじみ」を詠った句の数々である。何をしみじみと感じるかは人それぞれであると、しみじみ思う。

人生にこんなに余白あったのか 南北
老いぼれた姿を晒す足の爪 完司

被災地にしみ入る寒さその辛さ

喜代志

老いて候たった一人で聞く花火

千代子

最悪の日々もあつたがふるさとよ

みちる

我が夫とよくぞここまで連れ添つた

敦

しみじみと蟻に自分を重ね見る

遊楽

独り酒ほんとの味を知つてから

千代子

文字の縁明朝体がいまさらに

みちる

平和ボケつい口ずさむ労働歌

泰光

しみじみと鏡に映る父の顔

修一

大方が選挙に行かぬ国の損

宇牧

しみじみと語れば月もおりてくる

美恵子

少し酔いましたと父母を語り出す

三津子

しみじみと聞く語り部の黒い雨

幹夫

青春に恋の一つもしたかった

よしこ

しみじみと過ぎた昭和を懐かしむ

美智代

一人よりもつとしみじみ老い二人

喜一郎

しみじみと酌んで追悼八代亜紀

土竜

しみじみと句集「あしあと」読み返す

春子



アーモンドの花



京都出町・本満寺の桜